

ヘーレボールトと 17 世紀のライデン大学における

デカルト主義の隆盛

榮福 真穂

序

アドリアーン・ヘーレボールト (Adriaan Heereboord, 1614-1661) は、17 世紀中葉のオランダの知的世界を理解する上で非常に重要な人物である。第一に、彼は当時のオランダにおけるデカルト主義の隆盛において大きな役割を果たした。たとえばファン・ブングは、当時のライデン大学でデカルト主義が隆盛をみせたのは、逆説的にヘーレボールトの折衷主義 *eclecticism* のおかげであったと指摘している¹。のちに詳述するように、ヘーレボールトはデカルトに親和的な態度を取るいっぽうで、伝統的なアリストテレス的スコラ学の枠組みも保存しようとしていた。この折衷的な態度によって、当局にとってのデカルト主義の危険性はそれほど高く見積もられず²、結果的に大学におけるデカルト哲学の教授は、少なくともしばらくの間は禁止されるに至らなかったと考えられている。第二に、ヘーレボールトの著作は、当時のみならずそれ以降の時代にも、教科書として広く用いられていたことが知られている。とりわけ『論理学綱要 (*Hermeneia logica*)』(1651) は、論理学の教科書としてオランダ国内の大学で用いられただけでなく、オックスフォードやケンブリッジにおいても再版されるほど広く普及していた³。

また、ヘーレボールトは、スピノザのスコラ的なターミノロジーの主要な源泉と見なされていることから、スピノザ研究者からの注目を集めてきた⁴。実際、ヘーレボールトは、スピノザの著作において名指しで言及される数少ない著者の一人である⁵。また、スピノザは『短論文』第 1 部第 3 章において作用因を 8 つに区分するが、この区分は上野も指摘するように、ヘーレボールトのものと酷似している⁶。こうした事情から、ヘーレボールトの哲学の内実は一定の関心を喚起してきたものの、未だ本格的に研究されているとはいえない。ヘーレボールトの師であったブルヘルスデイクについては、1993 年にまとまった論集が刊行されているのに

¹ van Bunge, *From Stevin to Spinoza*, 46.

² とはいえ、後述するように、同大学の親正統派カルヴァン主義の教授たちには非常に危険視され、深刻な対立が生じている。

³ Cf. Nolan(ed.), *The Cambridge Descartes Lexicon*, 361.

⁴ スピノザが 1661 年半ばまでにレインスブルフに住んでいたとすれば、ライデン大学のヘーレボールトによる講義を聴講していた可能性がある。Cf. Krop, “Heereboord”, 72.

⁵ Cf. 「形而上学的思想」第 2 部 12 章。

⁶ 上野, 175, 注 [4]。またそこでも指摘されているが、スピノザの蔵書目録のなかにヘーレボールトの著作はない。

対し⁷、ヘーレボルトにかんするそのような研究の集積は未だ存在せず、その名を冠した論文すら数えるほどしかない⁸。総じてヘーレボルト研究は端緒に終わったばかりと言えるが、近年では、個別の論点についてスピノザとヘーレボルトとの理説を比較し、ヘーレボルトは特定のトピックにおけるスピノザの直接的な批判対象だったのではないかと提案する研究も現れている⁹。

本稿では、このように重要性が認められつつも未だ実像が見えてこないヘーレボルトの生涯と思想を概観したい。まず 1 節では、未だ詳細の知られていないヘーレボルトの生涯を簡単に紹介したのち、2 節では「ライデン危機」と呼ばれる、ライデン大学において生じたデカルト哲学の教授をめぐる深刻な対立を取り扱う。最後に 3 節では、ヘーレボルトの哲学的立場はなぜ折衷主義と呼ばれるのか、その基礎的な理解を確認し、さらに、そのことがもたらした教育的な効果の観点から、ヘーレボルトの意義を検討したい。

1. ヘーレボルトの生涯の概略

ヘーレボルトは、1614 年 10 月 13 日にライデンで、ヨハン・ヘーレボルトとコルネリア・ファン・ダイフハイゼンとの間に生まれた（父ヨハンは地元のラテン語学校の教師であった）¹⁰。ザルトボメルとホルクムでそれぞれ初等・中等教育を受けたのち、1629 年にライデン大学に哲学および神学部の学生として入学する。卒業後はゼーラント州のミデルブルフの学校に勤めたのち、1641 年にライデン大学の哲学の員外教授¹¹（professor extra ordinem）に任命される¹²。1642 年にはライデン大学内の Statencollege（ホラント州議会によって設立された奨学生向けの改革派神学カレッジ）の副学部長に任命された。1643 年 3 月に発行された討論集に

⁷ Cf. Bos, *Franco Burgersdijk (1590–1635)*.

⁸ 近年刊行された Cellamare and Mantovani(ed.), *Descartes in the Classroom* には、ヘーレボルトを主題とする 2 本の論考が収録されている（Hotson, H., “The Philosophical Fulcrum of Seventeenth-Century Leiden: Pedagogical Innovation and Philosophical Novelty in Adriaan Heereboord”; Del Prete, A., “Teaching Cartesian Philosophy in Leiden: Adriaan Heereboord (1613–1661) and Johannes De Raey (1622–1702)”）。これらの論考の内容については、3 節で扱う。

⁹ Sangiacomo, “Aristotle, Heereboord, and the Polemical Target of Spinoza’s Critique of Final Causes”. サンジャコモはこの論文で、スピノザの目的因批判がアリストテレスではなく、ストアレスに依拠するヘーレボルトに向けられているのではないかと論じている。

¹⁰ van Bunge (ed.), *The Dictionary of Seventeenth and Eighteenth-Century Dutch Philosophers*, 395.

¹¹ 近世オランダの大学における役職名や機関名の訳語については、別府「現代ドイツ大学教師の種類」を参考にした。また、この点について京都大学大学院文学研究科准教授（2025 年現在）の安平弦司先生に助言をいただいたので、ここで御礼申し上げる。

¹² なお、教授就任時期にかんしては、上記のクロップによる項目にしたがって 1641 年としたが、ファーベークは 2003 年の記述では具体的な年号を記載せず、2016 年の記述では 1640 年とするなど、見解が分かれている。

デカルトへの初めての言及があるため、ヘーレボールトのデカルト哲学への傾倒はこの頃に始まったと推測される¹³。ヘーレボールトのデカルトへの傾倒はデカルト本人にも何らかの形で伝わっていたようで、1644 年 1 月 8 日付のデカルトの書簡に、「ライデンの哲学教授 [ヘーレボールト] は公然とわたしに賛意を表明してくれている」¹⁴という仕方で名前が登場している。同年には倫理学の正教授に任命されるが、自身に敵対的なアダム・ステュアート (Adam Stuart, 1591-1654) の希望が彼より優先され、自然学と形而上学の教授となったため、ヘーレボールトはこの人事に不満を抱いたという¹⁵。1647 年、上司のレフィウス (Jacobus Revius, 1586-1658) によるデカルト反駁が始まる¹⁶。レフィウスによって 5 つの反デカルト的な論題が提出されたことに端を発する一連の論争は、最終的に州総督も介入せざるをえなくなるほどの事態へと発展した (のちに詳述する)。この事件において、ヘーレボールトは慎重な姿勢を見せつつも、デカルト擁護のために尽力した。ヘーレボールトは学生たちに人気があったため、彼の態度表明は影響力を持ったようである¹⁷。

このような学術的な貢献のいっぽうで、ヘーレボールトは酒癖の悪さとそれに付随する素行の悪さによっても知られていた。1646 年 12 月に自身の学生であったピーター・ド・ラ・クール（Peter de la Cour）の姉妹であるヨハンナと結婚するが、1648 年 4 月 19 日、妊娠中の彼女を家から追い出す仕方で離婚する¹⁸。この酒癖と素行の悪さは彼の身を破滅させることになる。1652 年に同じく親デカルト派のホリウス (Jacobus Golius, 1596-1667) は、「ヘーレボールト教授は心身ともに病んでいる」ため、学問的職務をもはや果たせないだろうと大学評議員たちに報告せざるをえなかった¹⁹。これにより職を辞することとなったが、ヘーレボールトは 1661 年に死去するまで、いくつかの討論会を主宰し、多くの教科書を出版するなど、大学のアカデミズムに関わり続けた。

2. ライデン危機

¹³ Del Prete, “Teaching Cartesian Philosophy in Leiden”, 63.

¹⁴ AT, iv, 77. 原文では “Professeur en Philosophie de Leyde” となっているが、AT 版の注釈でヘーレボールトのことであると補足されている。AT, vi, 78.

¹⁵ van Bunge (ed.), *The Dictionary of Seventeenth and Eighteenth-Century Dutch Philosophers*, 395.

¹⁶ レフィウスは今日ではむしろ神学者としてよりも詩人としてその名が知られている。レフィウスについては、Goudriaan, *Jacobs Revius* に詳しい。

¹⁷ van Bunge, *From Stevin to Spinoza*, 46.

¹⁸ van Bunge, *From Stevin to Spinoza*, 46–47.

¹⁹ van Bunge (ed.), *The Dictionary of Seventeenth and Eighteenth-Century Dutch Philosophers*, 396.

では次に、ヘーレボールトがオランダにおけるデカルト哲学の普及において果たした役割を語る上で不可欠な、ライデン大学における一連の論争の経緯について少し詳しく述べておこう。哲学史家のファーベークが「ライデン危機」²⁰と呼ぶこの論争は、デカルト哲学を危険で冒流的なものとみなす数人の神学教授たちによって提出されたいくつかの論題に端を発する。本節では、主にファーベークの研究に基づいて、この事件の経緯を紹介する。

まず、1647年2月4日から3月20日の間に、神学教授レフィウスによって5つの反デカルト的な議論が提出された²¹。それらは、大学での討論会のために提出された一連の論題の一部であった。さらに、レフィウスと同じくカルヴァン派の神学教授であったトリグラント (Jacobus Trigland, 1583-1654) もまた、1647年3月27日に予定されていた討論会のための補題において、デカルトを非難した²²。ヘーレボールトはこの時、この補題を撤回するようトリグラントに促したと報告されている²³。しかし結局、補題は撤回されず、討論会の中心的な議題となってしまった。

デカルト自身による報告によれば、人々はその討論会で「デカルトが冒読者であるかどうか、そしてその賛同者がそれを判断する資格をもっているかどうか」²⁴について専ら議論した。デカルトの批判者と賛同者との陣営は分かれ、ヘーレボールトは後者に属していた。ヘーレボールトは「厳重かつ慎重な戒めをもって、真実と無実の保護を引き受けてくれた」²⁵と、デカルト自身によって報告されている²⁶。バイエによれば、デカルトは自らへのこうした非難について、ライデンの二人の神学教授、ヘイダヌス (Abraham Heidanus, 1597-1678) とシュパンハイム (Friedrich Spanheim, 1600-1649) ²⁷から聞き²⁸、ヘーレボールトに手紙で事情を尋ねている²⁹。デカルトはヘーレボールトの報告を踏まえ、ライデン大学の評議員 (curator) たち

²⁰ Verbeek, *Descartes and the Dutch*, chap.3.

²¹ Verbeek, *Descartes and the Dutch*, 40. なお、5つの議論のうち、1つ目は方法的懐疑にかかわり、2つ目は神の存在のアプリオリな証明の可能性にかかわり、3つ目は「神の観念」から出発する神の存在証明にかかわり(ここで明示的にデカルトの名が持ち出される)、4つ目と5つ目は神の自己原因性にかかわるものである。Cf. Verbeek, *Descartes and the Dutch*, 40-43.

²² Verbeek, *Descartes and the Dutch*, 43. なお、トリグラントの批判は、デカルトが議論の過程において、神を欺く者として仮定することに向けられている。デカルトが実際に欺く神の可能性を信じていたかどうかにかかわらず、そのような仮定を行うこと自体が神への冒読である、というのが彼の意見である。

²³ Verbeek, *Descartes and the Dutch*, 44.

²⁴ AT, v, 6.

²⁵ AT, v, 7.

²⁶ Verbeek, *Descartes and the Dutch*, 44.

²⁷ 同姓同名の息子 (Friedrich Spanheim, 1632-1701) ものちにカルヴァン派神学者となっているので注意が必要である。混同を避けるため、しばしば年長のシュパンハイム (Spanheim the elder) と年少のシュパンハイム (Spanheim the younger) と呼び分けられる。

²⁸ Baillet, *La Vie de M. Des Cartes*, 315.

²⁹ 1647年4月19日ヘーレボールト宛書簡。Cf. AT, iv, 631-632.

に書簡を書いた³⁰。デカルトはそこで、レフィウスとトリグラントは、彼らによるデカルトへの批判は明白な虚偽であったとして撤回し謝罪すべきであり、また評議員たちはそれを命じるべきだと主張した³¹。

この書簡について、1647 年 5 月 20 日の運営会議で話し合われた。評議員たちは、その年の学長 (rector) であったシュパンハイムと、当事者であるレフィウス、そしてこの問題と関わりの深いヘーレボールトを呼んだ。シュパンハイムは、これ以上のトラブルを避けるため、賛否を問わずデカルトの哲学を話題に上げることが禁止することを提案した³²。レフィウスとヘーレボールトは「友好な関係」を保つよう叱責され、とりわけヘーレボールトは、アリストテレス哲学の範囲内にとどまるよう勧告された。

しかし、これで一件落着とはならなかった。当然ながら、デカルトはこの措置に納得しなかったからである³³。デカルトはふたたび評議員たちに手紙を書き、自分が議論の俎上に上がることで自体に抗議したかったわけではなく、自分が抱いていない考えまで自分に帰されていることに不満を持っただけだと述べた³⁴。ヘーレボールトもまた、上記の命令に反し、1647 年 6 月の討論会においてデカルトの意見を議論のなかに組み込もうと試みた³⁵。

もう一方の側では、反デカルト的な形而上学教授ステュアートが、1647 年 12 月 23 日の討論会でデカルトの見解について議論する意向を表明していた。このときステュアートの論敵となったのが、若きデ・ラーイ (Johannes de Raey, 1622-1707) である³⁶。この議題に対する人々の関心は圧倒的であり、ヘーレボールトによれば、「聴衆の頭は天井にまで達した」ほどだったという³⁷。この討論会では、デカルトの哲学的意見について本質的な議論が交わされたというより、どちらが評議員たちの命令に反しているかが争われたようである。一方ではステュアートが、かの哲学者の名前を挙げることは命令によって差し控えられるべきであるが、その意見

³⁰ 1647 年 5 月 4 日ライデン大学の評議員たち宛書簡。Cf. AT, v, 1-12.

³¹ Verbeek, *Descartes and the Dutch*, 46. なお、デカルトが特に撤回してほしいと望んだのは、レフィウスの主張した、デカルトはペラギウス主義であるというレッテルと、トリグラントの主張した、デカルトは神を冒瀆しているという非難であった。

³² Verbeek, *Descartes and the Dutch*, 46.

³³ デカルトは単に傷つけられた名誉を回復したかっただけでなく、自らの思想がオランダの大学教育に導入されることを望み、実際に働きかけていたようである。Cf. Cellamare and Mantovani(ed.), *Descartes in the Classroom*, 2.

³⁴ 1647 年 5 月 27 日ライデン大学の評議員たち宛書簡。Cf. AT, v, 35-39.

³⁵ Verbeek, *Descartes and the Dutch*, 47.

³⁶ デ・ラーイはヘーレボールトによって教養修士 (Magister Artium) に、翌日にはフォルスティウス (Adolph Vorstius, 1597-1663) によって医学博士 (Medicinae Doctor) に認定された。彼はユトレヒトではレヒウス (Henricus Regius, 1598-1679) の最も有望な弟子の一人であり、またライデンで 2 つの学部を短期間で卒業したことから、哲学か医学の教授候補と目されていたようだ。

³⁷ Verbeek, *Descartes and the Dutch*, 48.

が誰のものであるかは十分知られていると主張した。これに対しデ・ラーイは、評議員たちはその著者の名前を発音することだけでなく、彼の意見を論じることにも禁じていたと指摘した。ステュアートはやや興奮して、「評議員命令の何を知っているのだ？」と問うた。命令が発せられた場にデ・ラーイはいなかったからである。そして、「その場にいたレフィウス博士を紹介しよう」と、レフィウスの加勢を頼もうとした。しかしデ・ラーイは、隣に座っていたヘーレボールトを指し、次のように言い返した。「その場にいて、たまたま今ここにいるもう一人の教授を紹介します」。ステュアートは怒り狂い、椅子の上で暴れ、叫んだ。「私の公権力により、あなたに黙っているように命じる！ 黙れ、聞きたくない！」。聴衆も興奮し、学生たちによる乱闘騒ぎへと発展した³⁸。

この討論会におけるステュアートのデカルト批判に加え、2週間前にはレフィウスも『デカルトの方法の神学的考察 *Methodi cartesianae consideratio theologica*』と題した反デカルト的な新著を出版していた³⁹。ヘーレボールトは彼らに対抗するため、いくつかの論題を用意し、ステュアートによる討論会の翌週 12 月 28 日に討議すると発表した。この論題は学長にすぐに止められ、撤回するよう勧告された⁴⁰。ライデン大学の上層部にはこの問題を解決するよう強い圧力がかかり、州総督すら個人的に介入した。

しかし、さらに火に油をそそぐ出来事が起きた。デカルトの『掲貼文書への覚え書』の出版である⁴¹。もともとレヒウスへの応答として書かれたこの短い文書は、匿名の序文付きで出版された。ファーベークによればヘーレボールトによって書かれた可能性が高いというその序文は、レフィウスとステュアートへの批判的な言及を多く含んでいた⁴²。この動きに対し、レフィウスとステュアートはそれぞれ

³⁸ Verbeek, *Descartes and the Dutch*, 48–49.

³⁹ Goudriaan(ed.), *Jacobs Revius*, 109–161.

⁴⁰ Verbeek, *Descartes and the Dutch*, 51. ヘーレボールトは最終的に、評議員たちがハーグから戻ってくるのを待って判断を仰ぐために討論会を数時間遅らせることに同意するが、結局評議員たちは戻って来ず、翌年 2 月 8 日への延期が決まった。なお、この討論会は結局開催されなかった。Cf. Verbeek, *Descartes and the Dutch*, 51;61.

⁴¹ この覚え書はレヒウスからの批判に応答するためのものである。レヒウスはユトレヒトの教授であり、かつてデカルトの盟友であったが、のちに批判者となった人物。cf. Cellamare and Mantovini(ed.), *Descartes in the Classroom*, 2.

⁴² Verbeek, *Descartes and the Dutch*, 63.

新しい小冊子を出版することで対抗した⁴³。それらにおいて攻撃されているのは、デカルトというよりむしろヘーレボールトであった⁴⁴。

これに対して、ヘーレボールトが「最も真なる友人の一人」と評する「フィラレトゥス・エレウテリウス・アテニエンシス」による小冊子が出版された。その内容はステュアートとレフィウスに対するヘーレボールトの弁護であったが、著者は不明である⁴⁵。またヘーレボールト自身も、ちょうど『覚え書』出版と同時に、学生たちを相手に「哲学における議論の正しい方法」についてスピーチを行った。討論が適切に行われるためのいくつかの規則を提示する中で、ヘーレボールトは、反対者に黙れと言ったり公権力であると主張したりするなど、権威主義的なやり方で介入した場合、その責任は登壇者にあると指摘した。これは 12 月 23 日の討論会でのステュアートの態度への批判を明らかに暗示するものである⁴⁶。この「即興演説」はすぐに印刷され、付録としてライデン大学の評議員に宛てた公開書簡が添えられた。この手紙の中でヘーレボールトは、いくつかの演説や論争を要約し、すべての問題の原因はステュアートにあると述べた⁴⁷。

一連の騒動を受け、1648 年 2 月 8 日、評議員たちはついに会合を開いた。彼らはまずステュアートと呼び出し、デカルトについて語ることを禁じた 5 月 20 日の勅令になぜ従わなかったのかと尋ねた。ステュアートは、自分はこの勅令について聞かされておらず、聞かされていたとしてもその意味を理解していなかったと弁明した。次にヘーレボールトが呼ばれた。彼は勅令に背いたことを否定し、長い演説で自分の行動を弁護しようとした⁴⁸。

次に前任のシュパンハイム学長がやってきて、評議員たちに、ステュアートに反デカルト的な討論会を中止するように頼んだこと、ヘーレボールトによる神の自然な知識に関する討論会が遅れたのはステュアートのせいであることを告げた。シュパンハイムは 5 つの対策を提案した：(1)最近出版されたさまざまな小冊子を差し止めること。(2)形而上学の授業をすべて中止すること。(3)哲学の教授たちに、すべての論争を同僚たち、特にホリウスに提出するよう命じること。(4)恩赦と休戦を宣言すること。(5)討論会中のあらゆる平和の妨害に対する措置を講じること

⁴³ これらのパンフレットは画像ファイル等によってすら確認できなかったが、書誌情報はファーベークによれば以下の通りである。Revius, *Abstersio macularum quae ab Anonymo quodam, calumniosae praefationis in Notas Cartesianas auctore, ipsi aspersae sunt*. Leiden: I. N. van Dorp; Stuart, *Notae in Notos Nobilissimi cujusdam Viri in ipsius Theses de Deo, Theopolis*.ファーベークによれば、レフィウスのものはベルリンのプロイセン文化財団の図書館に一部、ステュアートのものはパリの国立図書館に一部保存されている。

⁴⁴ Verbeek, *Descartes and the Dutch*, 63.

⁴⁵ Verbeek, *Descartes and the Dutch*, 64.

⁴⁶ Verbeek, *Descartes and the Dutch*, 65–66.

⁴⁷ Verbeek, *Descartes and the Dutch*, 66.

⁴⁸ Verbeek, *Descartes and the Dutch*, 67.

49.特に2つめの形而上学の授業の中止の提案は興味深い。というのもこの提案は、のちに言及するように、この時点でのライデン大学における形而上学講座の位置付けの困難さに由来しているからである。

さて、評議員たちはさらに他の二人の神学者、トリグラントとレムペールを呼び出した。トリグラントは、哲学的論争と神学的論争が同じ時間帯に行われるため、「新奇なことが議論される場合、若者たちはそちらに行き、神学者たちのところに残る者はほとんどいない」という事実を苦言を呈した⁵⁰。デ・ラーイもまた、評議員たちの求めに応じ、前日の出来事を話した。どうやらデ・ラーイはステュアートに再び嫌がらせをし、スチュアートは自制心を失ったようだった⁵¹。

結果として、評議員たちはスチュアート、ヘーレボルト、レフィウスを厳しく叱責し、1647年5月20日の勅令に引き続き、全教授にアリストテレス哲学から逸脱しないよう命じた。また、学長と学長代理がシュパンハイムの協力を得て、すべての関係者の停戦協定を結ぶよう要請した。いくつかの話し合いの後、ヘーレボルトとステュアートはこれを承諾した。さらにいくつかの取り決めがなされた。神学者たちは哲学者たちよりも優先され、哲学者たちは一日に一回しか討論を行うことが許されなかった⁵²。哲学の討論は他の教授陣に提出されることが義務づけられ、私的な授業も禁止された。廷吏はこの争いの調査を依頼され、学部長は混乱を防ぐよう指示された。必要であれば、学部長は直ちに町の役人に通告しなければならなかった⁵³。

評議員たちの決定には誰も満足しなかったので、シュパンハイムが何らかの和解を達成しようと努力したが、ほとんど成功しなかった。1648年5月8日の会合で、評議員たちは再び私的な授業の問題に取り組んだ。デ・ラーイが自分の授業をデカルト哲学の宣伝に使っていたことが問題視されたのである。6月14日の評議員会の議事録には、デ・ラーイはすべての学部の教授の事前の同意なしに私的な授業を行うことは許されず、さらにデカルトの思想を広めることは控えるようにと記されている⁵⁴。

また、ステュアートとレフィウスはデカルト哲学を含む危険な思想に対する反論の自由を得られないことを不満に思い、他大学の神学部や教会会議に相談した

⁴⁹ Verbeek, *Descartes and the Dutch*, 67.

⁵⁰ Verbeek, *Descartes and the Dutch*, 68.

⁵¹ Verbeek, *Descartes and the Dutch*, 68.

⁵² このような状況だったので、ライデン大学においてデカルト哲学が教室で教えられることはほぼなく、討論会の自由な議論や私的な講義においてのみ取り扱われた。そこでの中心的テキストは『省察』であり、『方法序説』や『哲学原理』が中心だったレヒウスの時代から変化している。Del Prete, "Teaching Cartesian Philosophy in Leiden", 65.

⁵³ Verbeek, *Descartes and the Dutch*, 68.

⁵⁴ Verbeek, *Descartes and the Dutch*, 68.

がった。しかし、これは評議員たちに明確に禁じられた⁵⁵。ステュアートは、評議員たちにトラブルの元凶だと見なされていた上に、神学教授たちからの後ろ盾も失っていた⁵⁶。ファーベークによれば、評議員たちのステュアートへの冷淡な態度は、彼らがデカルト哲学に対して比較的寛容であったことを証明している。デカルトに対する勅令が何度も強化されたのは事実だが、デカルトの影響を防ぐために実際に行われたことはほとんどなかった。デカルト派が神学に干渉せず、慎重に行動する限り、彼らの邪魔をするものは何もなかった。逆に評議員たちは、神学者たちが哲学に干渉しないように目を光らせた。つまり評議員たちは、正統派の攻撃から哲学を守ったのである⁵⁷。

しかし、この方針の中で、形而上学の教授は難しい存在だった。もし彼がステュアートのようなアリストテレス主義者であったなら、彼は自らの学部の教授たちと争うだろう。しかし、もし彼がデカルト主義者であれば、神学者たちは彼を容認できないだろう。唯一の可能な解決策は、形而上学の教育そのものを抑制することだったのである⁵⁸。

3. ヘーレボールトの折衷主義

ヘーレボールトはいわゆる「オランダ・デカルト主義者 (Dutch cartesians)」であるよりも、「オランダ・スコラ学者 (Dutch scholastics)」のうちに数え入れられる哲学者である。ヘーレボールトの著作は、デカルトの哲学を部分的に取り入れつつも、アリストテレス・スコラ的な体裁を保っているからである。彼のこのような立場は「折衷主義」と呼ばれている。本節では、その内実および帰結について先行研究を参照しつつ見ていこう。

3.1. デカルト哲学、アリストテレス主義、カルヴァン派神学

デル・プレーテは、ヘーレボールトのデカルト哲学に対する態度の変化をより詳細に追跡している。デカルトの名前は 1643 年 3 月に初めて引用されることから、ヘーレボールトはこの頃にデカルトを知るようになったとデル・プレーテは推定する⁵⁹。その後の数年間において、デカルトの主張は幅広く取り上げられ、検討される。たとえば 1644 年から 1645 年にかけての討論集『天使について』では、先入見の批判、明晰判明な観念、神、魂、質料的形相への異議、疑いの重要性といった多岐にわたる主題について、デカルトの考えが紹介されている⁶⁰。1647 年から 1648

⁵⁵ Verbeek, *Descartes and the Dutch*, 69.

⁵⁶ Verbeek, *Descartes and the Dutch*, 69.

⁵⁷ Verbeek, *Descartes and the Dutch*, 70.

⁵⁸ Verbeek, *Descartes and the Dutch*, 70.

⁵⁹ Del Prete, "Teaching Cartesian Philosophy in Leiden", 63.

⁶⁰ Del Prete, "Teaching Cartesian Philosophy in Leiden", 64.

年までの期間においては、ヘーレボールのアリストテレス哲学に対する対立姿勢がますます強まり、アリストテレス反駁のために様々な著者たちが援用されるにもかかわらず、特定のデカルト主義の教義への言及はほとんど見られない⁶¹。しかし、デル・プレーテによれば 1649 年以降のヘーレボールは方針を変更しており、その結果 1654 年の『哲学探究』第二巻は、第一巻とは異なり本文中でも明確にデカルト主義的な命題を展開している⁶²。自然科学分野では、量 (quantity) と物体 (matter) の同一性、偶有性と実体の区別を扱う一連の論争においてデカルトへの明示的な言及があるものの、デル・プレーテによれば、1650 年代のヘーレボールは自然学を扱う際の折衷主義的なアプローチを変えたわけではない。デカルトは他の革新主義者 (novatores) と並置され続け、特に優遇されているようには見えないという⁶³。他方で、形而上学では印象は一変し、デカルトこそがスコラ哲学に対する唯一の代替案のように見えるとデル・プレーテは指摘する。例えば、『神学における哲学の濫用について』論争の付録は、スコラ哲学全体を非難する観点から、デカルトの主要な理論を要約している。そこでは、明晰判明に知覚されたものは誤り得ないことや、幼少期に身につけた偏見から自らを解放しなければならないことや、知識は 3 種類の観念 (生得的観念、獲得された観念、案出された観念) から引き出されること等が挙げられる。そしてこれらこそが、真の哲学的知識を獲得できる唯一の方法だと主張されるのである⁶⁴。このように、ヘーレボールのデカルトへの傾倒は次第に強まっていった。また、ヘーレボールのデカルト主義の特徴は、デカルトへの言及が主に形而上学と自然学において見られる点にあると言えよう⁶⁵。

このように、ヘーレボールは形而上学と自然学を中心にデカルトの見解を幅広く受け入れ、また著作や討論会で紹介していた。しかし、ヘーレボールを純粋な「デカルト主義者」と呼ぶことは決してできないという見方が研究者たちの間で一致している。たとえば、ヘーレボールはデカルト的な哲学的方法と、「我思う、ゆえに我あり」という論理がすべての知識の根幹をなす最初の真理であるという考え方に魅了されていたことが指摘されているが⁶⁶、これはベーコンへの共感と結びついたものである。デカルトはベーコンの見解、すなわち、精神はさまざまな偏見すなわち「イドラ」から解放される必要があるという見解に明確な共感を示して

⁶¹ Del Prete, “Teaching Cartesian Philosophy in Leiden”, 65.

⁶² Del Prete, “Teaching Cartesian Philosophy in Leiden”, 65.

⁶³ Del Prete, “Teaching Cartesian Philosophy in Leiden”, 66.

⁶⁴ Del Prete, “Teaching Cartesian Philosophy in Leiden”, 66–67.

⁶⁵ デル・プレーテは、ライデン大学の一世代後のデカルト主義者デ・ラーイのデカルトへの言及がもつばら自然学の範囲にとどまっていることを明らかにしている。Del Prete, “Teaching Cartesian Philosophy in Leiden”, 76.

⁶⁶ Nadler, *Spinoza*, 194.

いた。そしてこの解放は、私たちが特定の方法を使用し、デカルトのように数学の例を学問全体に適用した場合にのみ可能になる、と彼は考えていた⁶⁷。また、ヘーレボールトの「新しい」哲学への傾倒は、ベーコンとデカルトの真理探求の方法論に対してだけでなく、ラムス主義的な教育法に対するものも重要である。この点については次節で扱う。

デカルトやベーコンといった新しい哲学を積極的に取り入れたいっぽうで、ヘーレボールトは「古い」哲学も保存しようとしていた。この背景には、もちろん前節で詳しく見たような学内における対立や、その帰結としてのアリストテレスに即して授業を行うようにという大学評議員からの命令がある。その結果、ヘーレボールトはファン・ブングが「奇妙な折衷主義」と呼ぶアリストテレスとデカルトの独特な関連付けを行うこととなる。これについて、ファン・ブングは次のように述べている。

ヘーレボールトによれば、彼〔アリストテレス〕の「古い」哲学と、ダンテ、ペトラルカ、アグリコラ、エラスムス、ルター、メランヒトン、ホルラレウス、パトリッツィ、バッソ、ベーコン、コメニウス、デカルトといった革新者たちによってなされた仕事との本質的な一致は、まさに自然の探究こそが哲学の本分であるという意識にあった。[...]奇妙に思えるかもしれないが、ヘーレボールトはこのようにして、デカルトを、このフランスの哲学者に対抗するいわゆるアリストテレス主義者たちよりも、より忠実な「アリストテレス主義者」として提示したのである⁶⁸。

アリストテレスとデカルトとのカップリングは一見奇妙だが、彼が人文主義から被った影響に鑑みるとより理解できるかもしれない。ヘーレボールトが最も公然と批判するのはアリストテレス的なスコラ学であって、アリストテレス本人のことはむしろ卓越した自然哲学者として評価している⁶⁹。1641 年の就任演説では、彼は哲学史を古い時代と新しい時代に分け、中世においては修道士たちは真理を難解な言葉の背後に隠したが、エラスムス、ペトラルカ、そしてアグリコラが「ソクラテス的」哲学の自由を主張した時、スコラ哲学は崩壊したのだと述べている⁷⁰。

しかし、スコラ学への態度も一筋縄ではいかない。というのも、『哲学探求』などを見る限り、明らかにスコラ学の伝統を汲む哲学者、トマス・アキナスやスア

⁶⁷ Krop, “Heereboord”, 73.

⁶⁸ van Bunge, *From Stevin to Spinoza*, 48–49.

⁶⁹ van Bunge, *From Stevin to Spinoza*, 48.

⁷⁰ Krop, “Heereboord”, 73.

レスへの参照がしばしば見られるからである。特にスアレスへの言及は多い⁷¹。こうした事情から、コッペンスは明らかにヘーレボルトやその師であるブルヘルスデイクをスコラ哲学者として取り扱っている。オランダのスコラ学は、スアレスらの近世スコラ（第二スコラ）の系譜とも異なり、カルヴァン派神学の文脈の中で展開されていることに特徴がある⁷²。たしかにヘーレボルトは多くの点においてスアレスに依拠していることから、近世スコラに負っているところは大きいと言える。しかし他方で、自由論における「無差別 *indifferentia*」の位置付けといったカルヴァン派の教義の核心に触れるようなトピックにかんしては、ヘーレボルトは明確にスアレスおよびイエズス会批判に転じている⁷³。オランダのスコラ学を近世スコラに全面的に包摂することはできないように思われる。

以上に見てきたように、ヘーレボルトの折衷主義は、単にデカルト哲学とアリストテレス主義のみを折衷するものではなかった。そうではなく、彼が様々な時代の様々な哲学的言説の間で、さらにカルヴァン派の教義ともバランスを取ろうとした産物であると言える。実際に著作をみても、様々な学説を併記するというスタイルをとっていることが分かる。この背景には「議論こそ真理探求の道である」という学問的信念と、大学教員の仕事は自身の哲学体系よりも新旧の様々な学説を

⁷¹ コッペンスもヘーレボルトとブルヘルスデイクがスアレスの影響下にあることを指摘している。Coppens, «Spinoza et la conception scolastique de Dieu dans le contexte hollandais», 6.

⁷² そもそもカルヴァン本人の立場は、哲学が理屈で以って神について語るべきではない、そのような神学には意味がないという立場であった（Cf. van Bunge, *From Stevin to Spinoza*; 渡辺『カルヴァン』）。この点から見て、17世紀のオランダ当局が州立大学に対し、アリストテレスを出発点としたカリキュラムの堅持を求めたという事実は、不可解に思える。こうした事情については、コッペンスの次の説明が分かりやすい。「マコヴィウス（1588-1644）やフーティウスといった神学者たちが、スコラ哲学に典型的な形而上学を用いて、アリストテレス的な特徴を持つ改革派神学を確立した。改革派哲学は当時、具体的な形がなく、スコラの諸源泉が、それに必要な構造を提供することができた。スアレスのような哲学者は、古代哲学を明確に要約し、中世と17世紀の新しい哲学の仲介者として重要な役割を果たしたので、これに非常に適していたのである。この改革派の哲学者たちがスコラの諸源泉を用いて目的を達成したことは、我々にとって当然のことにように思えるが、実際にはプロテスタント界でカトリックの資料を用いることは、革新的なことであった。ルターは、1517年10月31日の有名な95ヶ条の論題に加えて、スコラ哲学に対する97ヶ条の論題を書いていたことを忘れてはならないからである」（Coppens, «Spinoza et la conception scolastique de Dieu dans le contexte hollandais», 3-4）。

⁷³ 「[恣意的な]自由意志の守護者、新旧のペラギウス主義、イエズス会士[...]は皆、同じように、人間の意志は、自然的、道徳的、市民的な事柄だけでなく、精神的、超自然的な事柄においても、神の命令に先立って存在する神の予動（*praemotio*）を与えられ、それを望むよう神によって定められたもの以外の何かを、またそれを望むよう神が動かすところのもの以外の何かを、依然として意志することができないかぎりには、意志は自由ではない、と彼らは主張する。こうした人々は、この[人間の]意志の無差別を少しでも損なうくらいなら、神の力能の何らかを減じ、全能でないようにすることを好むのである」。*Meletemata philosophica*, 270.

教えることだという教育理念とがあることが指摘されているので、次にこれを見ていこう。

3.2. オランダの大学におけるデカルト主義の隆盛

ファン・ブングによれば、ヘーレボールトが厳密なデカルト主義者でなかったからこそ、ライデンでのデカルト主義の隆盛が実現したのだと言う⁷⁴。というのも、デカルト主義は、オランダ政治の中枢と密接に結びついていた正統派カルヴァン主義と緊張関係にあったため、もしヘーレボールトが忠実なデカルト主義者であったなら、当局からの介入・弾圧はより厳しいものとなったであろうことが推測されるからである。このような政治的な理由だけでなく、教育改革の観点からも、ヘーレボールトが次世代におけるデカルト主義の開花を準備したことを明らかにしているのが、ホットソンの研究である。

上で言及したように、ヘーレボールトに影響を与えた「新しい」哲学にはラムス主義も含まれていた。ホットソンは、古典とその注釈という伝統的な形式よりも教育効果に重点が置かれた教科書を用いるラムス主義的な教育改革の潮流を、ヘーレボールトもまた汲んでいることを明らかにしている。ラムスの改革は、初めは神聖ローマ帝国の主要なプロテスタント系の大学やアカデミーのほとんどで拒否された⁷⁵。しかし 1570 年頃から、ギムナジウムの教員たちが徐々にラムスの提唱した合理的で体系的な教育法を用いるようになった。そうした機関を卒業した学生たちは、大学に入学した後も同様に効率的な指導を求め、大学に混乱をもたらした⁷⁶。この危機に対する典型的な対応は、改革派哲学者ケッカーマン（1572 年頃-1608 年）に見られる。彼は、アリストテレス哲学の内容を準ラムス主義的な教育形式で解説する新しい「体系的な」方法を導き出した⁷⁷。ケッカーマンの方法は広く受け入れられたが、ライデン大学は伝統的な方法を守ろうとし、それを廃止した。しかし、その後（東）中央ヨーロッパからラムス主義の教育法に慣れ親しんだ学生が多くオランダの大学に流入した。この時期（1620 年）に修辞学・倫理学の教授に就任したのがブルヘルスデイクであった。彼はケッカーマンの方法を論理学、自然科学、倫理学の教科書に適用し、これらの教科書は、17 世紀の第 2 四半期に改革派世界全体の標準となった⁷⁸。師ブルヘルスデイクの方針を引き継いだヘーレボールトは、しかし、1641 年の評議員命令に直面したことで、カリキュラムを再構築せざるをえなくなる。基本的にはアリストテレス主義を体系的に概説すればよかつ

⁷⁴ van Bunge, *From Stevin to Spinoza*, 46.

⁷⁵ Hotson, “The Philosophical Fulcrum of Seventeenth-Century Leiden”, 35.

⁷⁶ Hotson, “The Philosophical Fulcrum of Seventeenth-Century Leiden”, 36.

⁷⁷ Hotson, “The Philosophical Fulcrum of Seventeenth-Century Leiden”, 36.

⁷⁸ Hotson, “The Philosophical Fulcrum of Seventeenth-Century Leiden”, 37.

たブルヘルスデイクの時代とは異なり、今やデカルトやベーコンを含む「新しい」哲学のわかりやすい説明も求められていた⁷⁹。ヘーレボールの解決策は、古い哲学のために考案された方法を新しい哲学の教育に応用することだった。つまり、「新しい」哲学を教える際にも、彼ら自身のテキストではなく、教育効果のための順序で書かれた教科書を用いるということである⁸⁰。様々な著者の見解が併記されるヘーレボールの教科書のスタイルは、このような背景から理解されるだろう。

上述のように、ヘーレボールはラムス主義的な体系的教育法を継承して新しい哲学を教える際にも応用したが、言わずもがなそれはヘーレボール自身でいわゆる「哲学体系」を構築したことを意味しない。それゆえ、ヘーレボールは体系化に「失敗した」哲学者だとネガティブに評価されることもある。これに対しホットソンは、独自の哲学体系を構築しなかったことを教育的な利点として再評価しようとする。つまり、ヘーレボールの総覧的・折衷的で、ともすれば一貫性のない著述スタイルは、教育上の必要に駆られてのものであったというのである。

『『哲学探求』の核心的な機能は、学生に閉じた哲学「体系」を教えるということではなく、むしろ、構造化されながらも開かれた形で、現代の哲学的議論を学生に紹介することを目的としていた」⁸¹。この革新的な哲学教育の恩恵を受けた次世代の哲学者には、デ・ラーイ、クラウベルク、ヴィティッヒといった「オランダ・デカルト主義者」の黄金世代だけでなく、スピノザも含まれているとホットソンは評価している。反対に、後続の世代が教条主義的なデカルト主義(Cartesian orthodoxy)に移行したことは、まったく進歩ではなく、むしろ開かれた考え方から不毛な体系構築への退行であるとホットソンは主張する⁸²。

ヘーレボールのこうした開かれた教育理念は、彼の哲学探求における態度とも親和性がある。デカルトとはまったく異なり、彼は真理探求の真の方法は議論であると考えていた。前節で見た 1648 年 1 月 13 日のスピーチでは、彼は次のように述べている。

複数の目は一つよりも多くのものを見る。鉄は鉄によって研がれ、人は人によって研がれる。それは、真理の探求が人間を闘争に駆り立てるからだけでなく、真理が葛藤から得られることが期待されているからでもある。もし真理の全体がそれ自体で知られているなら、そして裸の子供がすでに哲学者であるなら、議論の必要はないだろう。しかし、人間の条件がそれらの必要性を物語っており、実際、人間の知性の本性そのものがそれを求めている。人間は社会的な存在であり、相

⁷⁹ Hotson, “The Philosophical Fulcrum of Seventeenth-Century Leiden”, 51.

⁸⁰ Hotson, “The Philosophical Fulcrum of Seventeenth-Century Leiden”, 53.

⁸¹ Hotson, “The Philosophical Fulcrum of Seventeenth-Century Leiden”, 55.

⁸² Hotson, “The Philosophical Fulcrum of Seventeenth-Century Leiden”, 56.

互に会話しながら人生を過ごす。もちろん、誰もが同じように話したり、感じたりすることはない。逆に、一方が承認したものは他方によって否定される。どちらも正しいと言えるだろうか？⁸³

この学問観はまったくデカルト的ではない。しかし、こうした態度が、結果的にライデンにおいてデカルト哲学を延命させることになった。評議員たちの不介入に見られるように、哲学する自由は比較的守られ、次世代の哲学者たちに繋がったのである。

結語

以上、本稿ではヘーレボールトの生涯およびライデン危機の経緯、ヘーレボールトの「折衷主義」の内実と背景およびその効果を見てきた。またその評価にかんして言えば、多くの研究が彼を独自性のない哲学者だと断じ、ときにスピノザにスコラのターミノロジーの源泉を提供したことを指摘するにとどめてきたのに対し、近年の研究では教育の観点からヘーレボールトのオランダ哲学史における重要性が指摘されているのが興味深い。ヘーレボールトが学問を議論によって行う集団的営みだと考え、授業では答えを教えるのではなく学生自身が考えるための素材を提供すべきだと考えていたとすれば、彼の意見は驚くほどアクチュアルな響きをもっている。彼は偉大な哲学者ではなかったかもしれないし、また間違いなく最低の家庭人ではあっただろうが、学問と教育にかかわるわれわれの尊敬すべき先達とは言えるのではないだろうか。

凡例

ヘーレボールト『哲学探究』にかんしては、著作全体を通じて通しページ番号が付されている利便性から、以下の版を参照した（多くの先行研究もこの版で参照指示をしているが、おそらく同じ理由だと思われる）。

Heereboord, A., *Meletemata philosophica*, Amsterdam; London, 1680.

なお、このテキストは Internet Archive（下記 URL）からダウンロードしたものである。

https://archive.org/details/bim_early-english-books-1641-1700_adriani-heereboord-m_heereboord-adrian_1680/mode/2up, 最終アクセス日 2025 年 11 月 1 日。

また、デカルトへの参照は Adam&Tannery 版を用い、慣例にしたがって「AT, 巻数, ページ数」で表した。

二次文献

Baillet, Adrien. *La Vie de M. Des Cartes*, Paris: Daniel Horthemels, 1691.

別府昭郎「現代ドイツ大学教師の種類－歴史的パースペクトからの考察－」, 『大学史研究』, 6 号(1990): 27-37.

Bos, Egbert and Krop, Henri, eds. *Franco Burgersdijk (1590-1635): Neo-Aristotelianism in Leiden*. Amsterdam-Atlanta: Rodopi, 1993.

⁸³ Heereboord, *Meletemata philosophica*, 29.

- Cellamare, Davide and Mantovani, Mattia, eds. *Descartes in the Classroom*. Leiden; Boston; Köln: Brill, 2023.
- Coppens, Gunther, «Spinoza et la conception scolastique de Dieu dans le contexte hollandais», Jaquet, C.(ed.), *Les Pensées métaphysiques de Spinoza*, Éditions de la Sorbonne, 2021.
- Del Prete, Antonella, “Teaching Cartesian Philosophy in Leiden: Adriaan Heereboord (1613–1661) and Johannes De Raey (1622–1702)”, In *Descartes in the Classroom*, edited by Davide Cellamare and Mattia Mantovani, 60–78. Leiden; Boston; Köln: Brill, 2023.
- Goudriaan, Aza(ed.), *Jacobs Revius: The Theological examination of Cartesian Philosophy*, Leiden; Boston; Köln: Brill, 2002.
- Hotson, Howard, “The Philosophical Fulcrum of Seventeenth-Century Leiden: Pedagogical Innovation and Philosophical Novelty in Adriaan Heereboord”, In *Descartes in the Classroom*, edited by Davide Cellamare and Mattia Mantovani, 34–59. Leiden; Boston; Köln: Brill, 2023.
- Krop, Henri, “Burgersdijk. Franck Pieterzoon (1590–1635).” In *The Bloomsbury Companion to Spinoza*, edited by Wiep van Bunge, Henri Krop, Piet Steenbakkers, and Jeroen van de Ven, 60–62. London: Bloomsbury, 2011.
- . “Heereboord Adriaan (1614–1661).” In *The Bloomsbury Companion to Spinoza*, edited by Wiep van Bunge &alt., 72–73. London: Bloomsbury, 2011.
- Nadler, Steven, *Spinoza: A Life*, 2nd edition, Cambridge University Press, 2018.
- Nadler, Steven &alt., eds. *The Oxford Handbook of Descartes and Cartesianism*, Oxford: Oxford University Press, 2019.
- Nolan, Lawrence, eds. *The Cambridge Descartes Lexicon*, New York: Cambridge Univeresity Press, 2016.
- Sangiacomo, Andrea. “Aristotle, Heereboord and the polemical target of Spinoza’s critique of final causes”, *Journal of the History of Philosophy* 54(3) (2016): 395–420.
- スピノザ, バルーフ・デ「神、そして人間とその幸福についての短論文」, 上野修訳, 上野修・鈴木泉編『スピノザ全集 V』, 岩波書店, 2023.
- van Bunge, Wiep. *From Stevin to Spinoza, An Essay on Philosophy in the Seventeenth-Century Dutch Republic*, Brill, 2001.
- van Bunge, Wiep. &alt., eds. *The Dictionary of Seventeenth and Eighteenth-Century Dutch Philosophers*, Bristol: Thoemmes Press, 2003.
- van den Berg, Johannes. «Le Protestantisme réformé en Europe au XVIe et au XVII siècles», In *L’Europe protestante aux XVIe et XVIIe siècles*, edited by John Miller, 193–208. Belin, 1997.
- Verbeek, Theo. *Descartes and the Dutch: Early Reactions to Cortesian Philosophy, 1637-1650*, Carbondale; Edwardsville: Southern Illinois University Press, 1992.
- 渡辺信夫『カルヴァン 人と思』, 清水書院, 1995.
- 山内志朗「アドリアヌス・ヘーレブール『哲学探究』について」, 『人文科学研究』(新潟大学人文学部紀要) (2005): 57–73.

Adriaan Heereboord and the Blooming of Cartesianism in Leiden University at the Seventeenth-Century

Maho EIFUKU

Adriaan Heereboord (1614–1661) is a crucial figure for understanding the Dutch intellectual world in the mid-17th century. First, he played a major role in the rise of Cartesianism in the Netherlands at that time. Wiep Van Bunge, for example, points out that, paradoxically, the rise of Cartesianism at Leiden University was due to Heereboord's "eclecticism". Second, Heereboord's works are known to have been widely used as textbooks not only at the time but also since. In particular, his *Hermeneia logica* (1651) was widely used as a logic textbook not only at Dutch universities but also at Oxford and Cambridge, where it was reprinted. Third, Heereboord has attracted attention from Spinoza scholars because he is considered the source of Spinoza's scholastic terminology. In fact, Heereboord is one of the few authors mentioned by name in Spinoza's works. While Heereboord's philosophy has drawn some interest, it has yet to be thoroughly studied. There is no accumulated body of research on Heereboord, and only a few papers bear his name. This paper, for my future research, surveys Heereboord's life and thought, whose importance is recognised but whose real figure remains unclear. First, Section 1 gives a brief overview of Heereboord's whole life. Then, Section 2 addresses the "Leiden Crisis," a serious conflict that arose at Leiden University over the teaching of Cartesian philosophy. Finally, Section 3 provides a basic understanding of why Heereboord's philosophical position is considered eclectic, and then examines Heereboord's significance from the perspective of the educational impact it brought.